２人っきりにさせないといけないなぁ～と思っていた矢先、見ちゃったの！
偶然、飛影君と躯お姉ちゃんが２人でいるところを。
その時の飛影君は、すごく目が優しいのに、どこか大人ぶってるみたいで・・・。
躯お姉ちゃんの前で背伸びしているみたい。
まあ、頑張って背伸びしても、今の身長じゃあ、躯お姉ちゃんには届かないけどね。
力関係でもお姉ちゃんが上だし・・・
だけど、その差を埋めようと頑張っている姿にやられちゃって、応援したいのよね～！
それに飛影君は、躯お姉ちゃんと２人セットでいるのがピッタリよ！
すっごくお似合いなのよね！
奇淋さん、時雨さん、柘榴さん、一つ目さん、大きな鼻の妖怪さん達といる時とはまったく違っていて、雰囲気や態度で、「ああ、飛影君にとって、躯お姉ちゃんは『特別』なんだ。」と自然に思えたわ。もちろん、逆も言えるけどね♪
だから、飛影君の恋を応援しちゃいま～す！

「どうした、麻弥？」
「え！？」
「俺の顔に、何かついてるか？」
「い、いいえ！その～・・・綺麗だから、見惚れてました！」

魅入っちゃうことがあるのは本当だけど、今のはそうじゃなかった。
だけど、相手に自分の考えを知られたくなくて、そう言って誤魔化した。
それに躯お姉ちゃんは小さく笑い、飛影君は舌打ちした。

「蔵馬から躯に乗り換える気か？」
「失礼だよ、飛影君！私、そんなにふしだらな女じゃないよ！」
「フン・・・どうだか・・・。」
「飛影、あまりいじめるな。」

黒衣の少年にそう言うと、躯は麻弥を見ながら聞いた。

「どうだ、魔界の暮らしは？」
「はい、お日様がない以外は・・・人間界と同じ気がします。」
「おひさま？」
「太陽のことだ！」

後ろから不機嫌そうに飛影が言えば、ああ、あれかと躯がぼやく。

「そうだな。ここは厚い雲に覆われ、雷鳴しかない場所だからな。」
「躯お姉ちゃんは、魔界は長いんですか？」
「どういう質問だ！？躯は、魔界の者だから魔界しかないだろう！？」
「そ、そうだけど！秀ちゃんみたいに・・・人間界で暮らす妖怪もいるじゃない？」
「貴様の秀ちゃんは『特殊』だ。人間界で妖気を得て変化し、魔界へ流れて来た狐だからな。」
「へぇ～じゃあ、都会に出たけど、結局故郷にＵターンした人みたいね。」
「どんな例えだ・・・！」
「そういえば、幽助君は？彼も・・・妖怪と聞いたんだけど？」
「あいつもあいつで、かなり特殊なケースだ。」
「え？また『特殊』～？」

聞きなれてしまった言葉に、眉をひそめる麻弥。飛影も同じような顔をしながら聞き返す。

「『また』だと？」
「そうよ。もしかして、飛影君さ～私に説明するのが面倒だから、秀ちゃんも幽助君も『特殊』だってまとめてない？」
「どこがだ！？こんなに親切に話してやってるだろう！？」
「だって、確率が高すぎるもん。」
「確立だと？」
「まるで特殊ケースの妖怪ばっかりで、集まってるみたいなんだもの。飛影君達は。」
「・・・・好きでそうなったわけじゃない・・・！」

もっともな意見に、目を閉じて怒りながら答える飛影。

「そう言うな、飛影。似た者同士、気が合うだろう？」
「どこがだ！？」
「あれ？じゃあ、飛影君も『特殊』な妖怪なの？躯お姉ちゃん？」
「そうなるな・・・。お前も狐や幽助に負けないぐらい、めったにないレア者だぜ？」

意味ありげに、微笑みながら言う相手に舌打ちする飛影。
その意味を知らない麻弥は、普通に感心しながら言った。

「そうだったんだ～言われてみれば、飛影君は躯軍へスカウト１年目で、下剋上してNo２になったんだものね？」
「だからなんだ？」

「魔界の三つ目小僧って強いんだね！」
「みっ・・・・！？」
「くっ！くっくっくっ・・・・！！」

その言葉で、絶句する飛影と、口元を抑えて震える躯。
それで、不機嫌だった飛影の機嫌がさらに悪くなる。

「殺すぞ、貴様！誰が小僧だ、誰が！？俺は邪眼師だ！！」
「だって、邪眼師がどういう者か、わからないんだもん。」
「ハハハ！邪眼師というのは、額についた目を使うことによって、なんでも見通せる力を使う者のこと・・・探し物に便利という能力だ。」
「あ！だから、パトロールの人間探しで重要なのね？」
「そういうことだな。ついでに言えば、こいつは炎を操る妖怪でもあるんだぜ？」
「すごーい！じゃあ飛影君は、ファイヤーしょーりゅーけんとか使えるんですか？躯お姉ちゃん！？」
「龍は出せるよな、飛影？」
「龍！？ドラゴンね！素敵だわ～ねぇねぇ、飛影君！見せて！見せて！」
「いいだろう・・・！黒こげにしてやろう・・・！」

口元を引きつらせ、腕の包帯を解こうとしている男を躯が止める。

「やめろ、飛影。大人げないぞ？」
「うるせぇ！どいつもこいつも、ガキ扱いしやがって！！」
「俺は、ちゃんと大人扱いしてるぜ？」

そう言いながら、飛影の耳元に唇を寄せる躯。
麻弥の角度からは見えなかったが、耳に軽くロづけていた。

「っ！？」
「俺は、飛影が立派な男だって、思ってるんだけどな？」
「フン・・・！」

それを受け、少しだけ機嫌が直る飛影。そんな男に目元を緩めて微笑む躯。
２人が、少し良い雰囲気になった時だった。

「あ！？見て見て、躯お姉ちゃん！飛影君！」

「どうした？」
「っ・・・！今度はなんだ・・・！？」
「あれ！建物じゃない！？」

甘いムードををぶち壊す人間の言葉。
そう言った視線の先を見れば、覚えのある街があった。

「フン・・・・癌陀羅か。」
「がんだら？」
「ほお・・・そんな近くまで来ていた。」
「え！？なに？２人共、あそこを知ってるの？」
「知ってるも何も・・・お前、俺とあそこで会っただろう？」
「ええ！？あんなに大きな町だったの！？」

その返事に、目を白黒させて食い入る麻弥。

「すごいわ～！アメリカの都市よりも、大きいんじゃないかしら！？」
「麻弥・・・お前はあそこにいたのに、あの場所を知らんのか？」
「当然だ！桑原の次元刀で、会議室まで直行したからな！」
「そうなんです。和真君もすごかったなぁ～彼も妖怪なんて、世の中不思議よね～」
「・・・断っておくが、奴は正真正銘純粋な人間だ。」
「ええ！？そうだったの！？あんなに強いのに！？」
「だから、『特殊』なんだ。人間にしては、良い線いってるということにしておいてやる・・・！」

飛影にしては、珍しく褒めた言葉で説明する。それを知らない麻弥は、頷きながら言った。

「そうなんだ・・・私てっきり、飛影君の漫才の相方だから、彼も妖怪だと・・・」
「フン・・・見た目からすれば、妖怪とも言えるつぶれ顔ではあ――――――あん！？誰が漫才の相方だ！？」
「だって、幽助君がそう言ってよ？」
「幽助ぇぇぇ――――――――――――！！」
「アーハッハッハッ！」

そのやり取りに、耐えきれないとばかりに声を上げる躯。